【研究主題】少子化・人口減少社会に対応した活力ある学校教育の創造
【副　　題】地域とともにある学校をデザインする「４つの柱・８つの重点」

【学　校　名】北秋田市立義務教育学校阿仁学園
【役職・氏名】校長　小　林　陽　介

１　はじめに

「阿仁の学校は、これからどうなるのか」

私が阿仁中へ校長として赴任した令和４年当時、多くの保護者や地域の方々が抱いていた不安である。阿仁の児童生徒数が激減し、令和５年度から小学校２校と中学校１校が統合し、義務教育学校となることは決まっていた。しかし、具体的に学校はどう変わるのか。保護者や地域の方々はおろか、教職員もまだ明確な答えを持っていなかった。そういった状況の中、阿仁の実情に即した学校の在り方をスピード感をもってデザインし、保護者、地域、教職員、そして子どもたちの不安を希望に変えることが校長の使命であった。

２　研究の目的

本研究は、小規模であっても活力のある学校を目指すべく、義務教育学校の特性を生かした教育活動をデザインし、実践したものである。阿仁地区唯一の学校として、少人数でも質の高い教育が展開できることを実証することは、少子化・人口減少が進む本県における学校の在り方を考える際の一助になると考える。

３　研究の仮説

小規模義務教育学校の特性を生かしたグランドデザインを作成し、教職員、児童生徒、保護者、地域の方々と共有しながら実践することにより、活力ある学校教育を創造することができるであろう。

４　活動の実際

(1) グランドデザインの作成と共有

①　４つの柱

統合前の３校（阿仁合小、大阿仁小、阿仁中）は「知」「徳」「体」を学校経営の柱としつつ、ふるさと教育を推進してきた。この３校のよさを生かし、特色ある教育を展開するために、ふるさと教育を「愛」という柱で独立させ、学校経営を４本柱にした。中でも大黒柱は「愛」であり、それを本校の特色として打ち出すことにした。

②　８つの重点

新しい学校の立ち上げで意識したのは、重点を絞り込むことである。あれこれ全部並べると誰も見ない代物になるからである。そこで、一つの柱につき重点を二つとし、「４つの柱・８つの重点」を基本骨格とした。その上で、「４つの柱」は不易、「８つの重点」は毎年修正をかけていくことにした。

③　デザイン性にこだわる　※左：表　右：裏（実物は別紙）

本校が目指すのは「地域とともにある学校」である。子どもや先生はもちろん、保護者や地域の方々も同じ方向を見て協働する学校である。そのためには、教育ビジョンが誰にとっても分かりやすいものでなくてはならない。また、統合校開校にあたり、「これまでとは違う」という期待感も必要と考えた。そこで、重視したのが「デザイン性」である。具体的に配慮した点は次のとおりである。

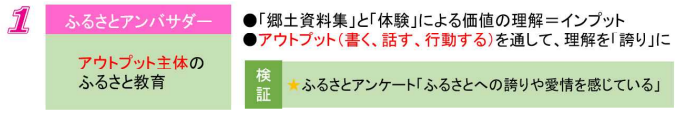
- Ａ４版表裏１枚、カラー仕上げとし、学校っぽくない雰囲気や全体の統一感を出す。
- 表面は、最重点の「愛」を「知」「徳」「体」が支えている構造が伝わるようなデザインにする。
- 裏面は「８つの重点」それぞれの「見出し」と「説明」を少ない文字数で簡潔に表現する。
- 重点ごとに評価規準を具体的に設定する。

④　幅広い共有

グランドデザインを教職員、児童生徒、保護者、地域の方々と次の方法で共有した。

・教職員：４月の職員会議で説明する。定例職員会議では重点ごとに達成状況をチェックする。
・児童生徒：始業式で説明する。終業式では８つの重点の中で特によかったことを紹介する。
・保護者：４月のＰＴＡ総会で説明する。学期末ＰＴＡでは、８つの重点の進捗状況を報告する。
・地域：第１回学校運営協議会で共有を図る。第２回は経過報告、第３回は成果と課題を明らかにし、次年度に向けた改善策を議論する。
・その他：学校ホームページで広く公開する。

(2) グランドデザインを基にした教育実践



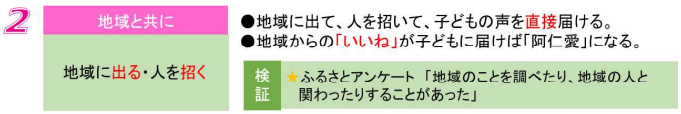
郷土資料集「きらり☆きたあきた」を活用し、アウトプットを通してふるさとの魅力を語れる人を育む。

①　きらりの日

金曜日の朝学習の時間を「きらりの日」とし、「きらり☆きたあきた」を活用してクイズを出し合ったり、プレゼンをしたり、ふるさとかるたを作って異学年交流しながら楽しんだりしている。

②　総合的な学習の時間（アウトプットの一例）

・３・４年生はクロモジを採取し、クロモジ茶づくり、デザイン、販売まで一貫して行っている。
・５・６年生は、他地区からお客さんをお招きし、阿仁の街歩き観光ガイドを実施している。
・７～９年生は、内陸線ＰＲを動画を作成したり、地元飲食店と提携して「阿仁ガチャ」を開発したりするなど、地域の魅力発信に取り組んでいる。
・秋田活性化中学生選手権で地元企業の活性化策を提案し、２年連続県大会最優秀賞を受賞した。



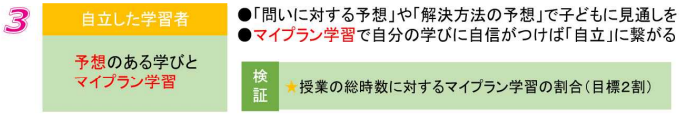
「地域とともに＝地域に出る＋人を招く」と整理し、地域の声と子どもの声が互いに届くようにしている。

①「地域に出る」の一例

・山（登山）、滝（散策）、川（川遊び）を１年毎に行い、９年間で３回ずつ体験できるようにする。
・阿仁スキー場に全校で行き、スキー教室と樹氷鑑賞を保護者や地域の方々と共に楽しんでいる。
・夏の花火大会でのダンス披露、冬のイベントでの雪像づくりなど、地域の行事に積極的に参加する。

②「人を招く」の一例

・正課クラブは、全て地域の方を講師としてお招きしている（郷土料理、茶道、ニュースポーツなど）。
・画家の永沢碧衣さんに学校の会議室を画廊として提供し、制作活動の合間に授業をしていただいた。
・阿仁婦人会の方々に阿仁音頭を直接教えていただき、体育祭では地域の方々と一緒に踊っている。



自立した学習者の育成に向け、予想を重視するとともに、小人数に適した学習スタイルを追究している。

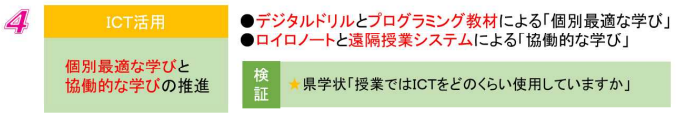
①　予想のある学び

予想することが目的ではなく、その意義を理解し「機能させる」ことを重視する。予想の意義は次のとおり。

・予想とは既習事項や生活経験を活用し即興的に考えること。いつでもできる「習得と活用」である。
・予想は一人一人違う。予想にズレがあるから、それが「論点」になり、話し合う意義が生まれる。
・予想すると答えを知りたくなる。「予想通りなのか知りたい」それが追究意欲である。
・授業の終末に、予想とまとめの違いに着目させることで、本時の学びを自覚させることができる

②　マイプラン学習（自由進度学習）

学習内容は決まっているが、いつどのように学ぶかを子どもが計画し、学習していく手法である。ポイントは、単元の目標、時数、利用可能な教材、早くできた場合の学習方法などを記した「学習の手引き」を使い子どもに学びの見通しをもたせることである。一斉指導は、教師のタイミングで進められるため、一定数の急かされる子と待たされる子が出るが、本学習は、自分のペースで考え、自分らしく学ぶことができる。この授業スタイルは、少人数である本校との親和性が高く、全授業の２割をマイプラン学習で行っている。



ＩＣＴ活用の目的を「個別最適な学びのため」「協働的な学びのため」の二つに整理し、実践を重ねる。

①　個別最適な学びの一例

・デジタルドリル（スマイルネクスト、学研ニューコース）を学校や家庭でシームレスに活用する。
・「Life is Tech Lesson」でプログラミングを自

分のペースで学び、オリジナルＨＰを作成する。

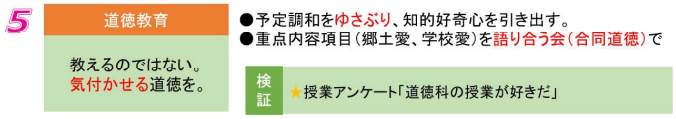
・「毎日パソコン入力コンクール」に登録・挑戦し、個々のタイピング能力の向上を図る。

②　協働的な学びの一例

・「ロイロノート」で互いの意見を共有したり、分類したりして話合いの広がりや深まりを促す。

・「Microsoft Teams」を使って他地区の生徒や学生と意見交流する。（Ｒ６は上小阿仁小、岩見三内中、吉備国際大、秋田高専と交流）

なお、県学状児童生徒質問紙調査で、本校は、「ＩＣＴ機器をほぼ毎日使っている」が100％であった。



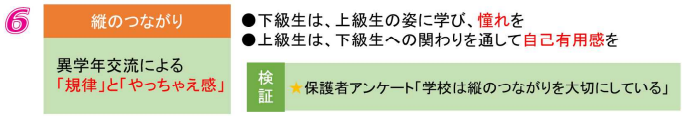
分かりきったことをなぞる授業をやめ、重点内容項目を機能させて特色ある道徳教育を推進している。

①　道徳科の授業改善

校長が講師となり、指導法の研修会を行った。また、各学年の道徳の時間をずらしたり、各種訪問等の際は先生方も自由参観できるようにしたりしたことで、授業交流が進み、道徳科の指導力が向上している。

②　語り合う会（合同道徳）

本校の重点内容項目は、経営の大黒柱「愛」に関わる「郷土愛（郷土を愛する態度）」と「学校愛（よりよい学校生活）」である。この授業を３～９年生が合同道徳として縦割りで行うことが本校の特色である。



９学年の縦の繋がりが義務教育学校の特色である。さらには、保育園児や卒業生とも繋がりを深めている。

①　異学年交流

・行事を縦割りで行う。例えば体育祭は、遊競技、応援合戦、全員リレーなどを縦割りで実施。玉入れは保育園と１・２年生が合同で行い、３～６年生は補助、７～９年生はダンスで盛り上げた。

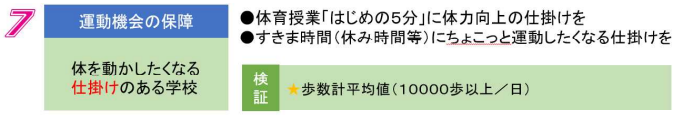
・花の苗植え、プール掃除などの奉仕活動は前期課程児童と後期課程生徒をペアにし両者を育てる。

・卒業生を「10年生」「11年生」と呼び、学園祭などへの参加を奨励し、縦の絆をより深める。

②　「規律」と「やっちゃえ感」

・５・６年生をミドルリーダーとして育成すべく７～９年生と共に活動させる（児童生徒会選挙等）。

・上級生の「規律（礼儀など）」と「やっちゃえ感（前向きな挑戦）」に下級生が触れる機会を設け、上級生に自己有用感を、下級生に憧れを抱かせる。



体育授業はじめの５分に体力向上の仕掛けをつくり、歩数計プロジェクトにより運動意欲を高めている。

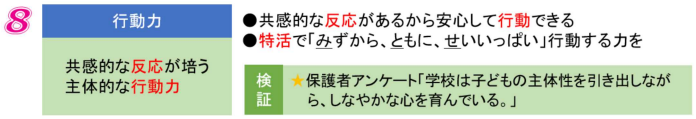
①　体育授業「はじめの５分」

・１～６年生は、様々な動きを散りばめた「マリオコース」を設置し、はじめの５分で実施している。

・７～９年生は、YouTubeを活用したりしながら、多様な動きのエクササイズ継続して行っている。

②　歩数計プロジェクト

・全校児童生徒が歩数計を付けて生活している。歩数を入力すると距離に換算して内陸線の列車が進んでいくExelシートを開発し、毎日入力している。



重点８は「主体性」の項目である。重視しているのは、「行動力」とそれを支える「反応力」である。

①　行動力

児童生徒会担当者は、経営の重点が児童生徒会テーマに反映されるよう、執行部の話合いをコーディネートする。令和６年度は、重点８「行動力」を踏まえ、テーマは「動（ドゥー）（Do!）」になった。それは、先生からの「行動せよ」という指示が、子ども同士の「行動しよう」という呼びかけに変換されたことを意味する。

②　反応力

人は共感的な反応があるから安心して行動できる。うなずく、拍手する、笑うなど、反応力の育成と行動力の育成は表裏の関係にあると捉えて指導している。

(3)　義務教育学校の特性を生かす仕組み

①　乗り入れ授業

本校では、10教科で乗り入れ授業を行っている（国算社理体音図家技外）。体育、音楽、図工（美術）は専科であり、５・６年生はほぼ教科担任制である。高い専門性を生かした指導が本校の大きな特色である。

②　日課表の工夫

小中一貫校でネックとなるのが授業時間の違い（小45分、中50分）である。本校では、休み時間を前期課

程は15分、後期課程は10分とし、始業時間が全学年揃うようにした。その結果、乗り入れ授業や縦割り活動を柔軟に展開できるようになった。なお、チャイムは始業時のみ、終業時はノーチャイムである。

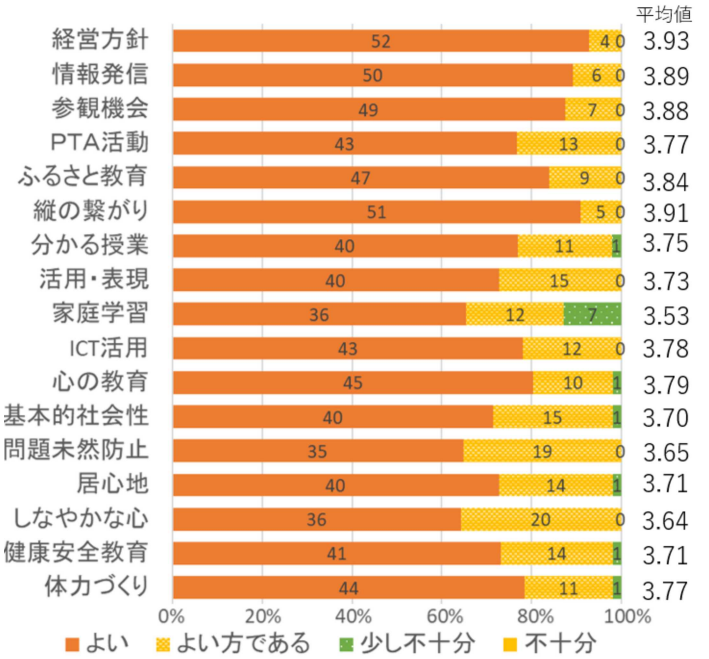
	前中期課程（1～6年生）	後期課程（7～9年生）
1　校　時	8：40～　9：25	8：40～　9：30
2　校　時	9：40～10：25	9：40～10：30
友遊タイム	10：25～10：45	10：30～10：45
3　校　時	10：45～11：30	10：45～11：35
4　校　時	11：45～12：30	11：45～12：35

③　複式授業の解消

本県の教職員定数配置基準では、義務教育学校への特別配当（１人）が認められている。また、教頭は２人配置だが、それを１人にし、その分を教諭に振り替えられる。本制度による人的優位性を生かし、複式学級も一部の授業は単式で行っている。これにより、教師は単学年の授業を少人数できめ細やかに実施でき、児童は自学年の学びに集中できるようになった。

5　検証と考察

(1)　保護者からの評価　＊保護者アンケート（R6 12月 回答者56名）平均値は4段階のよい方から4～1として算出



・平均値は全て3.5以上で、全体的に高評価である。
・「学校経営」「縦の繋がり」が3.9を超え、特に高い。
・本校が重視する「ふるさと教育」も評価が高い。
・学校経営の重点を丁寧に説明し、その経過を保護者と共有し改善してきた成果だろう。

(2)　地域からの評価（R6学校運営協議会 4段階評価）

愛：4　知：3.5　徳：4　体：3.5　平均3.75

・学校に対する地域からの信頼の高さが読み取れる。

＜学校運営協会委員から寄せられた声＞

・温故知新。昔からの活動を大事にしながら、新しい活動にも取り組んで郷土愛を育んでいる。
・他校ではできないことを体験できる学校だと思う。
・下級生は先輩の姿から学び、上級生も下級生との関わりを通して思いやりの心が育っている。

(3)　本校児童生徒の評価　＊Ｒ７全国学力・学習状況調査質問紙から

質問内容	学年	当てはまる（全国比）	肯定的回答率（全国比）
分からないことや知りたいことを自分で学び方を考え、工夫することができる【知】	6	71.4(+38.8)	100(+18.3)
	9	40.0(+12.6)	80.0(+2.5)
地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う【愛】	6	85.7(+51.9)	100(+18.6)
	9	40.0(+17.6)	90.0(+14.6)
道徳の授業は自分の考えを深めたり、学級の話合いに取り組んだりしている【徳】	6	71.4(+24.1)	100(+11.8)
	9	90.0(+57.4)	90.0(+2.7)

・児童生徒の主体性の高まりが読み取れる。学校経営の柱に沿ってブレない指導をしてきた成果だろう。

(4)　本校教職員による評価　＊Ｒ７学校経営反省（７月）から

	教育目標　めざす学校像・生徒像・教師像　経営の重点	4	3	2	1	評価
1	「4つの柱」と「8つの重点」の内容を共通理解し、それらを意識した教育活動を展開しているか。	19	2	0	0	⑦ 3.90 ⑫
2	愛（ふるさとに誇りをもち）…地域との関わりを大切にするとともに、アウトプット主体のふるさと教育を通じて、ふるさとへの誇りや愛着を育んでいるか。	21	0	0	0	⑦ 4.00 ⑫
3	知（自ら学び）…予想のある学びやICTの活用、マイプラン学習などを通じて、主体的に取り組み、深く考え、学びを生かそうとする児童生徒が育成されているか。	14	7	0	0	⑦ 3.67 ⑫
4	徳（共に高め合い）…道徳教育や学年の垣根を越えた交流などを通じて、互いに認め合い、助け合い、感動を共有し合う児童生徒が育成されているか。	15	6	0	0	⑦ 3.71 ⑫
5	体（たくましく生きる）…体育はじめの5分、はつらつタイム、ミニマラ、歩数計プロジェクト、部活動指導などを通して、児童生徒の体力の向上を図っているか。	13	8	0	0	⑦ 3.62 ⑫

・グランドデザインが教職員に意識化されている。それが各種学校評価の高さに繋がっているのだろう。

8　成果と課題

＜成果＞

・保護者、地域、教職員からの信頼が高まり、みんなの学校として活力ある教育活動を展開できている。
・「４つの柱・８つの重点」の徹底により、児童生徒が目指す子ども像に向かって着実に成長している。

＜課題＞

・本校は上学年は各10名程度在籍しているが、３年生以下は各２～４名である。今後、極小規模校として活力を持続するための対応が求められる。

9　おわりに

本研究は、グランドデザインを、教職員、保護者、地域、児童生徒など学校に関わる全ての人に機能させることによる教育的効果を追究してきた。今後も、「地域とともにある学校」として、愛、知、徳、体を柱としながら特色ある教育活動を展開していきたい。